

離れていても必ずまた会いましょう

瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ 崇徳院

訳：川の流れが速いので、岩にあたって二つに分かれた川が、また合流するように、恋しいあの人と今は別れても、また必ず会おうと思います。

今年度、全国の競技かるたを愛好する高校生に「百人一首のなかで一番好きな和歌は？」というアンケートをとったところ、第1位となった和歌です。百人一首のなかで、「せ」から始まる歌は、この一首しかありません。「1字きまり」の札なので、選手は、「せ」と聞こえた瞬間に勢いよく札を払うことができるというのも人気の理由ですが、それ以上に、歌の内容と作者の崇徳院の数奇な運命に人気があるようです。

作者の崇徳院は、父親の鳥羽天皇から自分の子ではないと疑いをもたれ、愛されずにわずか5歳で天皇として即位しました。即位後も実権は上皇となった父が握り対立が続き、保元の乱を起こします。争いに敗れた崇徳院は讃岐に流され、都に戻ることはありませんでした。この歌は、激しい恋の歌ですが、逆境の中に生きた崇徳院の運命と激しい川の流れを重ね合わせて鑑賞すると、さらに歌の魅力が増していきますね。

小野田高等学校小倉百人一首かるた部顧問 青池のぞみ